

日本的市場主義

—— 伝統思想の現代的形態 ——

小 谷 清

1 はじめに

強い正義感と使命感を持って、市場メカニズムの意義を説いて回っている一群の人々がいる。彼等は、現代日本では市場メカニズムが働いていない、または、一步譲って、日本経済は市場経済の本来の在り方から逸脱していると論じる。日本経済は本来の市場経済の在り方と異なるというニュアンスを響かせるために、彼等は、現代日本の種々の様相・諸制度慣行を、たとえば日本的雇用慣行というように、「日本的」という語を冠してしばしば呼ぶ。さらに、彼等は日本を市場経済化することによって、または本来の市場経済に戻すことによって、高い経済成長率や消費者利益の増進といった多くの利益を日本は享受できると主張している。

私は、いま述べた多数の人々の見方とは逆に、日本経済は他と大差ない平凡な市場経済であると考え。彼等が異常な結果とみるものを、多くの場合市場メカニズムの自然な結果と考える。むしろ、市場メカニズムや市場経済についての彼等の理解が本来のものから逸脱したものと、私は考える。そこで、この小論では、彼等に倣って、彼等の経済観を日本的市場主義と呼び、彼等を日本的市場主義者と呼ぶ。

この小論の目的は、日本的市場主義とはどのようなものであり、どのように本来の市場主義の考え方から乖離したものであるかを示すことである。より具

体的には、日本的市場主義とは、一時代前には優勢な社会思想であった社会主義と市場経済の考え方の習合したもの、特に前者の思考枠組みに適合するように、後者を再解釈したものであると主張する。日本的市場主義者は日本経済を社会主義的であるということがある。私は日本経済が社会主義的とは思わないが、日本的市場主義は社会主義的であると思う。

日本的市場主義者は革新的進歩的であると自認している。しかしながら、日本的市場主義は社会主義よりも更に以前の徳川時代に溯る伝統思想の現代的表現であると思われることも最後に述べる。

2 エコロジー秩序としての市場経済

市場経済とは何かという問いに最も優れた解答を与えたのは、一般均衡理論の標準となるモデルを示したK. J. Arrow and G. Debreuでもなく、市場経済についての教祖的存在であるM. Friedmanでもなく、F. Hayekであろう。この節ではHayekの市場経済観を敷衍しつつ、市場経済とは本来どのように考えるべきものかを述べる。同時に、日本的市場主義を本来の市場経済の考え方と対照させて、前者が後者からどのように乖離しているかもみる。

2-1 自然状態

ハイエクによれば、市場経済は自生的秩序 (spontaneous order) の一つである。「自生」という言葉は、誰かの意図や計画に従って生れたのではないという意味の内容を盛るのに適した言葉である。科学的研究 (例えば経済学) や機械システム (例えば飛行機) のように、前の成果の上に新たな成果が積み重なり、他の知見とも融合して、最初のプリミティブな種が、枝分かれしながら成長し膨らんでいき、最初には思いもかけなかったような壮大で複雑な機能を有する存在に発展するという事態を表現するのに、「自生的」という言葉は適した表現である。原始的な交易から始まった市場経済はその通りのものである。秩序と

いう言葉も、市場経済が無秩序なものとして見下され社会主義が称賛されたハイエクの生きた時代には、市場経済の持つ法則性を公衆に印象づけるために適した表現であったであろう。しかしながら、日本の市場主義との関連では、ハイエクの敢えて避けた表現ではないかと思われる、古い用語である自然状態という言葉で市場経済を私は表現したい。

自然状態という言葉は、ハイエクが批判し続けたT. Hobbsの社会観との関連で有名である。自然というのは人為（政府）によって意図的に人間社会に秩序が敷かれていない状態を意味する。常識的には、または第一直感では、自然状態はHobbsのいうとおり、人間の人間に対する闘争が間断なく続く、人間が極端に悲惨な生活を送らざるを得ない、無秩序・混沌といった言葉で適切に特徴づけられるような世界のように思われる。だから、ハイエクは自然状態という言葉を避けたのではないかと思われる。それにもかかわらず、私は市場経済が自然状態であると表現すべきと思うのは、常識的な第一直感には反する市場経済の逆説性を強調したいからである。ハイエクや市場経済の理論の創設者と普通されるアダム・スミスも考えていたように、自然状態は無秩序ではなく、そこには秩序があるということを強調したいからである。自然状態は市場によって秩序付けられているという逆説的な事実を強調すべきであると思うからである。以上を命題という形で要約すると、

命題1：自然状態は無秩序ではなく、そこには市場による秩序が存在する。

エコロジー ハイエクの使わなかった例をあげて命題1を説明すると、市場経済は自然界のエコロジー的秩序に類似したものであるといえる。¹ 70年代の初

¹ この点は既に小谷（1995）、ジェイコブス（2001）にも指摘されている。この小論では、市場経済の理解を得るために経済をエコロジーに喩える。しかし、ジェイコブス（同、P13）によれば、初期のエコロジストは、エコロジーの理解を得るためにエコロジーを経済に喩え、economyに意味の通うecologyという言葉を案出したそうである。

め頃迄、経済学は力学と似た数学的表現形式・論理形式を持つことが、経済学者によっては得意気に、経済学を心よく思わない社会思想家によっては反感を込めて指摘されることがよくあった。しかし、自然科学に類似を求めるならば、エコロジーが適切である。

エコロジー秩序は、田や畑または花壇、牧場といった人間の手によって意図的に作られた動植物界ではない。人間の手の加えられていない自然の中では、動物同士、植物同士で互いに争い殺しあっている。しかし、Hobbsの想定するような無秩序や荒涼とした風景は生じない。動植物は共倒れになっていない。動植物の意図とは別に、結果としてみると自然状態では、市場経済の参加者がそうであるように、種々の動物・植物がお互いに協力し支え合って共存共栄して、そして一定の秩序、エコロジー秩序が生じている。むしろ、人間が意図的に作った動植物の秩序（田・畑・花壇等）の方が、社会主義社会のように広汎な薬剤散布によってしか維持できないような不安定なものである。

市場経済に反対する人も市場経済をやはり自然状態と考える。彼等にとっては自然状態は、Hobbsにとってと同じく弱肉強食の支配する野蛮な状態である。これらの人々が忘れているのは、弱肉強食という表現の起源である動物界では弱肉強食の結果動物が共倒れになることはないということである。弱肉強食は動植物にとって都合のよいエコロジー的秩序を生み出している。市場経済をエコロジー秩序に類似したものとして考えることは、市場経済を弱肉強食の世界として反対する人々の初歩的な誤りを知るのにもよい。

2-2 市場経済の非歴史性

市場経済が自然状態であるということの重要な含意は、エコロジーと同様に市場経済が太古の昔からどこにでも存在していたということである。市場経済は歴史的な所産ではなく、非歴史的なものであり、歴史を貫く一貫した原理である。実際、シルクロードは太古の昔からあり、日本では紀元前3000年ごろに

は石器材料である黒曜石や石器自体の交易が広汎に行われていたことが知られている。つまり、

命題 2：市場経済は歴史的な存在ではない。

市場経済は太古の昔からどこにでも存在したというのは、多くの人々の市場経済の理解ではない。多くの人々は市場経済を、漠然とではあるが、歴史的な存在と理解している。マルクス主義のマインドコントロールからいまだ抜け出せないためもあってか、市場経済はヨーロッパでは18世紀の後半頃から生じた歴史上の一段階という暗黙の前提で経済問題を論じている人も多いようである。このような理解に基づいて、マルクス主義の影響下に依然ある人々や経済学に反感を持つ社会科学者の中には経済学を歴史の一時期を扱う限定的な学問にすぎないと、あえて軽視しようとする人も見かけられる。

歴史段階説 古い文献とはなるが、今でもアダム・スミスの標準的解説書の一つとされていると思われるので取り上げると、市場経済を歴史的な存在と理解する例として高島（1968）がある。高島は、アダム・スミスの議論は歴史段階上の市民社会の社会理論であり、また歴史主義的見方、つまり歴史には発展段階があって社会を動かす原理は各段階によって異なるという見方をスミス自身も抱いていたと主張している（高島（1968, P149））。日本もこれから市民社会とならねばならないから、近代化・市民社会化の闘士（同P13）であったアダム・スミスを研究することが大切だというのが、高島善哉、または大河内一男といった人々のアダム・スミス研究の動機であった。大河内（1968, P56）は、「自主独立の近代日本をつくりあげるための指南車としての『国富論』の意義は、封建的制約から容易に抜けだしえなかった日本資本主義にとっては、他のいかなる近代国家よりも大きかった」と述べている。

このようなスミス理解は、高島や大河内の生きていた時代の風潮に影響され

たもので誤りである。アダム・スミスは『国富論』でも『道徳感情論』でも自己の主張の傍証として古今東西（古代ローマ・古代ギリシャ・中国・インド・アメリカインディアン・ノルウェー・イギリス・フランス²等）のエピソードを縦横無尽に使用している。これは、スミスの生きた時代のイギリスとその他の地域と時代の社会が全く同じ原理で動いているということをスミスが当然の前提としているからである。³ アダム・スミスは、高島のいうように歴史上の一段階としての市民社会の理論として市場経済の機能を考えようとしたのではなく、命題2のように、つまり古今東西を貫く、したがって太古から全ての社会を動かす原理として市場経済を考えたとのである。

アダム・スミスの見方または命題2は、科学として当然の内容でもある。Popper (1957) のいうように世界は一樣であり同じ普遍的原理で動いていると考えるのが科学だからである。

² 発展段階説に従えば、18世紀中頃のフランスとイギリスは段階が違う。前者は封建的絶対王制であり、後者は市民社会である。

³ 高島 (1968, P59, P134) は、スミスが発展段階論をとっている例示として『国富論』の中の軍事費についての議論をあげている。しかし、高島が“段階”と表現しているものはスミスの用語では a state of society, 社会の状態である。高島がスミスの用語として進歩としているものは improvement, つまり改良である。マルクスの唯物史観を典型とする歴史発展段階説、つまり高級な原理が支配する社会へ不連続的に社会は移っていくという発想はスミスからは感じられない。むしろ、同一原理で動く社会が連続的に次第に見かけ上の姿を変えていくという見方がスミスの叙述からは感じられる。エコロジーとの類比をつづければ、スミスの a state of society は移り行く森林相の一局面的なものである。スミスが頻繁に使用する improvement という言葉は土地改良という場合に使われる語であって、スミスも土地改良の意味で使っていることが多い。スミスの improvement の意味は、土地をより深く耕し家畜のフンによって土地を肥えさせ、農業生産性が向上して人口密度が高くなること、またはより複雑な工作加工方法・技術を見つけてより込み入った機械や工法が使用されることを意味している。improvement は進歩といった鋭角的な、前の時代とは一画を期すといった意味では使われていない。またスミスが中国をヨーロッパよりも豊かで、最もよく耕され、最も土地が肥えた、つまり前述の意味で improve した社会と述べている (Smith (1979, P71-73, P95, P189)) ことも、スミスが発展段階論者でなかったことを示している。

なお、高島は同じ箇所ですミスの nations of shepherds を牧畜社会と訳しているが、正しくない。遊牧社会とすべきものである。この語を牧畜社会と理解すると、現代イギリスでも基幹産業である産業を指すことになって論旨が通らなくなる。高島には高度工業国家としてしかイギリスのイメージはなかったのかもしれない。

民度論 後の第3－1項でも論じるが、日本的市場主義者の中には、市場経済はどこにでも常に存在するものではなく、歴史的所産である文化的特殊性に依存するものと考えの人が少なからずいる。伊藤（1996, P126）は、規制を緩和して経済の市場化を進めることができるか否かは民度の問題としている。この考え方では民度が低いと市場経済にはなり得ないとされる。伊藤の民度の定義は不明ではあるが、どんな定義でも人々が読み書きのできなかった太古の時代は民度が低いとしなくてはならないだろうから、伊藤の主張に従えば太古の昔には、またいわゆる発展途上国には市場経済は存立しえないことになる。伊藤は本論のように市場経済を太古から存在する自然状態と考えるのではなく、高島やマルクス主義者のように文明進歩上の他と質の異なる高度な一段階としている。⁴

アングロ・サクソンの 市場経済を歴史的な存在とみるのに似た、市場経済に文化的特殊性をみようとする考えに、市場経済はアングロ・サクソンの社会の在り方であるという見解もある。この見解は、ナショナリズムに暗にアピールすることによって市場経済に批判的な底流を作るためにも、逆に、日本も先進諸国に伍さねばならないという観点から市場経済を日本的市場主義者が推奨するためにも利用される。

2－3 見えざる秩序

市場経済の意味を理解するには秩序という概念の理解も重要である。最も典型的な秩序として思い浮かぶのは、ナチスや旧ソ連で見られたような見事に足並みをそろえた軍隊行進である。または、都市計画によって作られた碁盤目状

⁴ 伊藤は、暗にアメリカは民度が高いので市場経済が進んでいると言っている。しかし、一般にヨーロッパはアメリカよりも社会主義的であり規制が強いと伊藤自身によって信じているが、ヨーロッパ人は内心アメリカを民度の低い国とみなしている。また、アメリカ人の中でも、自由な野放図な企業による利益追求を許し、政府による企業規制に反対するのを野蛮視する人々がいる。

もしくは同心円状に整然と走る道路である。さらには、警察の監視の下で人々が息をひそめて生活をしている全く犯罪のない清潔な共産主義国家のような社会である。以上の例が示すように、秩序という言葉は、人による意図的な行為の結果という意味を含んでいる。言うまでもなく、秩序の英語、orderには命令という意味もある。したがって、自然状態で秩序が存在するという主張には形容矛盾の臭いがつきまとう。自然状態では秩序がないというHobbs的理解は、字義通りの解釈としてむしろ極く自然である。

形容矛盾とならないのは、市場秩序は人間が意図的に作り出したものではないが、人間が跡付けた、発見した筋道という意味で秩序は人間の創生によるものだからである。アダム・スミスでは、神が造ったと仄めかすことによって自然状態で秩序が存在するという形容矛盾を避けたようである。このような論法は文字通りには、日本ではもちろん、現在のキリスト教社会でも受け入れないであろう。しかし、神の作った秩序とは、もともと、神が造った(したがって、人間が意図的に作ったのではない)隠れた秩序を人間が跡付け発見するという考えであって、やはり今述べたように秩序という概念は理解されていたようである。

人間が作ったのではなく、人間がパターンを発見したという意味での秩序は、ハイエクのいう科学的発見と同じことである。混沌と見える世界に一定の繰り返しられる筋を発見するというのが科学だからである。繰り返されるパターンが分かるので、予想ができるということであり、パターンを利用して工夫ができるということである。市場秩序も人々が一見無秩序と見える混沌の中に発見するものである。だから、スミスの用語を若干アビューズして、しかし本質を誤らないで使えば、市場秩序はinvisibleである。強調する意味で再び命題として書くと、

命題 3：市場の秩序はinvisibleで、自明に存在するものではなく、混沌の中に人

間が発見するものである。

命題3も命題2と同様に科学論として当たり前のことである。しかし、命題2が必ずしも常識的な経済理解と一致しないように、命題3はパラドシカルな社会観を含意する。多くの人々、特に市場経済に否定的な人々には、市場経済は汚濁と混迷と腐敗と不正に満ちた不潔な無秩序な世界に見える。命題3は、多くの人々にそのように見えるところに称賛されるべき美しい秩序が存在するというのが市場経済の考え方であると言っている。

エコロジー エコロジーの比喻が命題3の理解についても有用である。自然界にエコロジーという秩序があるのは必ずしも自明のことではなかった。嘗て自然は、人々が敢えて分け入ろうとはしない恐ろしい、気味の悪い場所であった。植物は無秩序に汚しく生い茂り、互いに絡み合って昼なお暗い場所であった。けがらわしい虫や奇妙な動物がうごめき、ぞっとするような鳴き声を立てている所であった。自然は魔物や妖怪の棲む所で、一步踏み入れば、人はそのような生き物に殺されて二度と戻っては来れないと信じられていた。このようなおぞましい見掛けとは反対に、自然界の本当の姿は、動植物の間で形成された精妙な、互いの生存を支えるメカニズムであると気が付くのがエコロジー秩序の発見であった。市場経済の理解についても、同じようなことが言えるというのが命題3の意味である。

腐敗と醗酵 市場経済は腐敗社会ではなく醗酵社会であると、命題3のパラドックスを喩えることもできる。腐敗と醗酵は同じことである。ともに微生物による炭水化物またはタンパク質の分解である。腐敗は人々に役立たないもので、醗酵は役立つものであるという定義をする人がいるかもしれない。この区別は成り立たない。鮎寿司・クサヤ・納豆・ある種のチーズは多くの人にとって腐敗でしかない。しかしながら、少数の人々にとっては美味である。酒は炭水化物を醗酵させたものであるが、もともとは貯めておいた食料が腐って妙な味が

したのを賞味したものとされる。もちろん、酒はある人々には致死性の毒物である。酒が腐敗すると酸っぱくなって人は捨てる。しかし酒の酸酵がさらに進んで酸っぱくなったのが酢である。市場秩序も同じことである。人間が物欲に動かされて生じる社会を狼狽で混乱した不潔な腐敗社会であると見ないで、酸酵として賞味するのが市場主義の考え方である。

人々は金権腐敗政治と日本の政治を糾弾する。この表現を使えば市場経済とは金権腐敗経済である。古い時代には金権腐敗経済、金がすべての汚い社会と言われていたのを、金権酸酵経済とみて、多くの政治批判とは逆に、金権腐敗を容認してその意義と機能を高く評価するのが市場経済の考え方である。

日本的市場主義者の秩序観 日本的市場主義者は、以上のパラドックスを理解しない。彼等は、市場の生み出す秩序をナチスやソ連の軍隊行進や碁盤の目状の道路のような整然とした、目にも明らかなものと考えている。⁵ 彼等は、曲がりくねった狭い道路沿いにゴタゴタと建ち並ぶ商店街や、安普請の建物の中に小商店が詰め込まれた市場（イチバ）ではなく、小奇麗で明るく整然と商品の置かれた大スーパーを市場メカニズムの所産と考える。市場経済は分業を発達させて、多段階で複雑な過程を経て製品が生産されるようになるのにもかかわらず、流通が複雑で多段階で長く、迷路のようにになっているのを市場経済が働いていない証拠と、日本的市場主義者は速断する。

市場経済の現実は一見して洗練されたと見える秩序ではない。市場経済は道徳家には汚濁と混乱としか映らない無秩序を生み出す。その中に隠れた見えざる美しい秩序を捜すのが市場経済の擁護なのである。魔物が棲むと信じられていた気味の悪い自然に精妙な生命連鎖のメカニズムをエコロジストが発見したように、腐臭の中にフナずし愛好者が芳香と美味とを味うように、不潔な錯綜の中に美しいメカニズムを看取するのが市場主義なのである。

⁵ 野口 (1992, P133) は「日本の都市は狭くてごみごみした印象を与える」と述べ、それは市場メカニズムの働きを阻む法制度のためだと論じている。

2-4 分散した知識

市場経済の利点としてハイエクが強調したものに分散して存在する知識の利用がある。経済の運行には、知識・情報という言葉で普通表される高度の知識や情報、例えば科学的知識や重大な政治変化についての情報だけで事足りるわけではない。経済の運行には、その場その場にある、持っていることさえも気にとめられることはないが、それを持っている人は当然前提として行動する知識、取るに足らないと普通は思われている、情報や知識といった大げさな言葉では表現されないような知識や情報も不可欠である。経済の運行に重大であるが、普通には取るに足らないと思われるような知識や情報は一カ所に集まっているわけではないし、特定の人が全てを保有しているわけではない。そのような知識は分散していて多くの人々に断片づつもたれている。このような知識全体を一カ所または一人に集めることは困難である。たとえ一カ所に集めることが可能だとしても、膨大すぎて一人の人がすべてを利用するのも困難である。だから、社会主義や中央集権的計画経済は不可能で非現実的であるとハイエクは指摘した。市場経済の許す各経済主体による分権的意思決定は、保有者自身が利用することによって、分散して存在する一見取るには足らない知識を経済運行に利用することを可能にするのである。

以上述べたことは、もちろんエコロジーとも共通する。各地点で生息する動植物の種は、地形・地質・気候等々についてのその場その場の特殊性に対応して決る。その特殊性は人が直ぐに見取れるものでもなく、またその量は膨大で、集中管理して、人が全体として利用できるものでもない。地点の特殊性に適応した種は互いにつながり、支え合ってエコロジーを形成する。エコロジーは各地点の地形・地質・気候の特殊性を利用して出来上っている。

説明不可能性 以上はよく知られた市場経済の利点である。多くの人々が認識していないのは、この含意である。市場メカニズムの結果（資源配分）が、分散して存在する、全体としては誰一人も自分で理解も利用も保有もし得ない知

識の反映であるならば、市場メカニズムの具体的な結果全てを説明しようとする人は、分散した知識を全て持っていなければならない。このような人の存在は上述の市場機構の存在意義に反するから、資源配分が市場のメカニズムの結果としてなぜ現にそのようになるのか、また将来どのようなようになるかは原則として誰も説明し得ないし、予想し得ないのである。逆の言い方をすれば、市場メカニズムの全ての結果がある人によって説明または予想されたとすれば、市場を廃止して、その人が中央経済計画当局者になって資源配分を指示すればよかったことになる。市場メカニズムの結果が全て説明可能である、予想可能であるということは、分権的意思決定、つまり市場が必要でないということの意味する。

市場メカニズムの結果が一般に説明不可能ということは、市場メカニズムの結果が何の役に立っているのか、なぜそうなることが良いことなのか一般的には理解し得ないことである。再びアダム・スミスの用語を若干アビューズして、しかし本質は失わないで使えば、市場メカニズムの意図はinvisibleである。以上をまとめると、

命題 4：分散した知識を利用する市場メカニズムの具体的な結果は、説明できるとも、予想できるとも限らない。したがって、その意義と意味はしばしば、invisibleで、具体的には理解することが必しもできない。

市場経済を非人間的な社会制度と考える社会主義者のような人々は、命題 4 を理解していないのである。事実の表面にとらわれて、その事実を生み出す、潜んでいる知識・情報、よって合理的理由があるとは考えないのである。

市場機構の不機能宣言 日本的市場主義者は、靈驗あらたかな信心を説いて回るように、市場経済を称賛しその教育宣伝活動に励んでいる。しかし、彼等の多くは、命題 4 を理解しないという点で、市場経済を批判する人々と変わら

ない。彼等は、自分がこうあるべきであると思う結果を市場機構が生み出すと信じ、また市場メカニズムの結果は誰の目にも明らかな恩恵を人間に施すと考えているからである。そして、自分の予想するのとは異なる様相みると、市場メカニズムは働いていないと断ずる。しかし、命題4のいうように、市場メカニズムの結果は必しも予想できないし、またその結果の意義は一般には分かり得ないのである。

ある様相が市場メカニズムの結果ではないと主張するには、先に述べたような断片的で取るに足らない知識を全て知っていなければ主張することができない。さもなければ、自分の知らない知識・情報がこの様相の出現に関与しているということが常にありうるからである。だから、ある様相をみて市場メカニズムが働いていないと断じるのは、自分が全ての分散した知識を持っていると宣言するのに同じであり、分散した知識の利用という市場経済についての基本的理解に反する。つまり、ある様相は市場メカニズムの結果だと説明できても、ある様相が市場メカニズムの働きには反する結果だと主張することは原則的にできない。ある様相が市場メカニズムの結果でないとは断ずるのは全ての関連知識を自分が持っているというのと同じだから、日本の市場主義者は、中央集権的計画経済主義者のように、自分が市場機構に取って代わることができると言っているのに等しい。

実際に観察される経済の様相が、市場メカニズムの下で生じると期待していたものと違ったとき、自分の気づかない、または知らない事実があつて自分の期待が外れたと考え、そしてそれは何かと探するのが市場主義である。例えば、大して基礎条件が違わないと思っていた日本とアメリカの様相が違っていたとき、特殊日本的制度や精神のために差を生じたのであるとか、日本では市場メカニズムが働いていないからと日本の市場主義者のように主張するのではなく、自分の日米に関する知識に足りないところがあると考えて、日米の様相の差を市場メカニズムの結果として説明できるような基礎条件の差を探するのが市

場主義の考え方であり、知識の分散性に由来する分権的意思決定の必要性ということの含意である。もちろん、予想外のことが起きたとき特殊例外的事故と日本的市場主義者のように考えないで、自分の知識不足のせいであると考えて欠けている知識は何かと捜すのが、フレミングによるペニシリンの発見や最近では白川氏の発見などにみられる科学的研究の進め方でもある。

2-5 資本主義の意義

1930年代の社会主義計算論争は経済学説史上有名である。前項で見た知識の分散性というハイエクの指摘は、この論争の中で社会主義の非現実性を示すために生まれてきたものである。中央計画当局の指令による全経済の運営という考え方の非現実性が納得されると、社会主義経済を市場経済として運営しようというアイデア、市場的社会主義が、オスカー・ランゲ、アバ・ラーナーといった人々によって提唱されるようになった。この考え方では、企業つまり生産設備は社会主義社会のように国家が所有する、しかし国家によって任命された企業マネジャーは資本主義社会のように利潤最大化を目的として企業を運営する。価格は国家が定める。ただし、国家はワルラスの競売人のように需給の差に応じて価格を変更する。こうして市場的社会主義では社会主義の目的とする富の平等が実現される一方で、資本主義社会下の市場機構による効率性をも達成することができると主張された。

私の知る限りでは、市場的社会主義の考え方には未だ有効な反論が加えられていない。⁶ 多くの人々は市場経済の意義を強調する。しかし、ランゲ等の提案の問題点を認識して社会主義を原理的に否定するには、市場経済の意義ではなく資本主義経済の意義を強調しなくてはならない。

⁶ Stiglitz (1994) は全面的に市場的社会主義の考え方を批判している。しかしながら、その批判は、市場メカニズムに対する批判の系として行われている。したがって、本論の立場とは異なる。

リスクの内部化とシグナル 市場的社会主義と資本主義経済の差は、資本主義では自分の稼いだ所得の中から資本を提供したものが経営上の、もしくは資本使用上の意思決定権を持つということである。下世話に言えば、資本主義社会は口を出すには金を出さねばならない社会である。このことは、まず、自分が決定者になるには自分の金を賭けねばならない、何かを決定するときその決定が失敗だったとき、失敗のコストを負う覚悟のある人が意思決定をする権利を持つということを意味する。更に、自分の決定が正しいと人に示すには資本を提供してシグナルを送らねばならないということを意味する。自分の判断は正しいと主張しても中々人々は信じない。資本を供出することによってその判断に自分の金を儲けてはじめて、熟慮した判断、または重要な内部情報に基づいた判断と人は信用する。ある人の経営上の主張は、どの程度の知識や熟慮、またはその人の個人的能力に基づいているのかを外部者は確かめようもない。その人の知識・熟慮・能力・情報を他人に示すのが、その主張に自から賭けようとする資金である。多額の自分の財産をリスクにさらしてでも主張するならば、その人は本当に根拠のある主張をしているに違いないと、外部者は想定する。最近の表現をすれば、リスクの内部化と資本提供のシグナリング効果が、資本主義経済を市場的社会主義から区別する重要な内容である。

ランゲなどの提唱する市場的社会主義経済では、マネジャーは自らの誤った意思決定によって財産を失わないし、自らの決定が正しいと示すためのシグナルを送ることもない。資本主義経済で資本提供者の下す経営上の決定、資本使用上の決定は思慮のあるものでありうるが、市場的社会主義の下で自己の決定の結果財産を失うことはない企業マネジャーの経営上の決定はいい加減のものとなりがちであり、市場的社会主義では熟慮した経営的主張をする人とそうでない人を区別する術（シグナル）もない。コーポレート・ガバナンス上資本主義経済より市場的社会主義経済は劣っている。

シグナルの問題ををよく例証するのは新しい技術の製品化である。発明家は

企業に自らの技術を売り込むもうとする。その技術が独創的で優秀で、想像もつかないようなブレイクスルーであればあるほど、売り込まれた企業は技術を理解できない。企業にとっては、その発明家は金をだまし取ろうとする詐欺師と区別がつかない。したがって、企業は技術を買わない。詐欺師は自分の売ろうとしている技術が偽りと知っているから自分では商品化しない。しかし、天才的発明家は自分の技術は本物であると自分では知っているから自分の資金で商品化する。⁷

市場経済の意義を高く評価しようとする人々は、否定的な響きを伴う資本主義という言葉を使いたくないようである。しかしながら、概念上市場的社会主義を含みうる市場経済よりも資本主義経済が優れているのである。

命題5：意思決定者が意思決定に自分の財産を賭けなければならない、意思決定者の資金提供が決定者自身にしか確かめえない、その決定をサポートする事実の存在をシグナルする資本主義は、企業統治上市場的社会主義よりも優れた社会制度である。

命題5のように理解すれば、資本主義はもちろん18世紀後半に始まった近代の制度という訳ではない。

M&A いま迄述べたことは、技術の例で見たように、知識の分散性は資本主義を余儀なくさせるということである。同時に、資本主義は知識の分散性を論理上補完する関係にあるとも言える。知識の分散性は、その場の事情に良く通じている当事者以外意思決定には口を出すなということである。しかし、それでは政府が上から命令するだけでなく、外部の他企業がある企業の意思決定をすることになるM&Aも、組織の上長が直接担当者である部下を入れ替えることも好ましくないという論理的な困難に陥る。命題5はこの論理上の困難を解

⁷ 以上の点に関連して、西澤（1988, P111-112）の逸話は興味深い。

決する。命題5は、全く事情を知らないと思われる外部の者が口を出してもよい、但し、口を出すには金も出さねばならないということを意味している。事情についてはよく知らなくとも、より優れた判断をできる、または事情自体も自分の方がよく知っているということを主張するには、まずその主張をバックアップする金を賭けねばならないということを意味している。M&Aや給料を支払う資本家が部下を代えるのは、金を出すことによって自分の判断を賭けているから好ましいのである。政府が介入していけないのはハイエクのいうように意思決定に必要な知識が不足しているからだけではなく、税金を財源としている政府（または、その実体である政治家・官僚または彼等に強い影響を及ぼすことのできる人々）は、自分の金を政府介入に賭けることはないため、無責任な介入や無謀な介入をしがちだからである。

日本の市場主義者は資本主義社会の最も重要な点、金を出してないものが口を出すなということを理解していない。たとえば、彼等は過剰債務企業を整理してそこに滞留している資本・労働をより有用・効率的な使途に回せと主張する。しかし、彼等は、この判断が正しいとバックアップするために、判断を誤れば没収される“供託金”を出すことはないのである。“供託金”を出している過剰債務企業の所有者、または融資銀行よりも彼等の判断が正しいと考える根拠はない。

2-6 市場機構の効率性

ある条件の下で市場メカニズムが効率的な資源配分を達成するというのはよく知られた命題である。しかしながら、効率性という概念は経済学理解の躓きの石である。常識的な用法に基づいて、多くの人々は効率性という言葉を工学的、生産的な効率性、または高所得という意味で理解している。このため、市場は人間を冷淡に機械や道具のように扱う存在として理解され、市場が資源配分を効率化するという主張は、却って市場機構に反感や嫌悪感を覚えさせるだけ

となる。経済学者を自認する人々も多くの場合効率性を工学的な意味で使っている。例えば、奥野（1990）では、スーパーが効率的というとき一人で多くのものを売れるという意味であり、野口（1993）では、土地が効率的に高度利用されていないというとき、文字通り建物が低いということやその土地を使ってもっと所得を稼ぐことができるという意味である。規制緩和によって市場メカニズムが働き経済成長が高まるといった、経済学者による市場機構の売り込みも効率性とは工学的生産性といったものを意味している。

しかしながら、市場メカニズムが達成するとされる資源配分の効率性とは、工学的効率性をその手段として含意することはあっても、それ自体を意味しない。つまり、市場メカニズムの達成する効率性は、工学的非効率性、技術的後進性、低利潤や低経済成長率といった多くの人が効率性という言葉では表現しないことをも含意する。市場機構による資源配分の効率性とは、ミクロ経済学の教科書に書かれているように、個々人の効用（価値観）を満たすのに効率的であるという意味だからである。ある個人の価値観を現状以上に満たそうとすれば他の人の価値観をより少くしか満たせないような資源配分を実現するというのが、市場メカニズムによる経済効率化の意味だからである。

命題 6：市場機構の効率性とは、他人を犠牲とすることなく人々の主観的な価値観をより良く満たすということである。

もし、人々の価値観がより多くのパンを食べたいというものであれば、またパン自体が目的でなくとも、パンを多く生産することによって間接的に人々の価値観がよりよく満たされるのであれば、命題6は生産の効率性を含意することになる。しかしながら、多くの人々が労働したくない社会では市場経済の下で経済は繁栄しないというのが命題6の意味するところでもある。これは非現実的な、反例のための反例を述べているのではない。

日本では、経済成長に伴って労働時間が減少してきている。これは人々の働きたくないという選好が市場を通じて実現しているのである。ある経済学者は、数学を勉強した人々は所得水準が高いから経済発展のためには数学教育を重視せよと言っている。明治以降の日本の経験からいって、これはその通りかもしれない。しかしながら、多くの学生にとって、数学は難しいから勉強するのは苦痛なので所得が高くなるとしても勉強したくない。したがって、所得水準が十分高くなれば、数学の勉強は苦痛だから多くの人が数学の勉強をしないために経済成長が低くなり、国民所得がさもないときより小さくなることになる。これは、市場機構の下で資源配分が効率的に行われたということである。先祖代々が耕し続けた田畑を手放すのはご先祖さまに申し訳ないから、工場用地や道路用地として田畑を農家が手放さないのは、田畑に対する愛着をカネよりも高く評価したものであって、所得や経済成長率は高まらないが市場機構の下で資源配分が効率化しているのである。東京の中心に低層で低度利用の建物が並んでいるのは、工学的効率性からいえば野口がいうように効率的ではないが、経済学的効率性からいうと、つまり命題6の意味からは効率的な資源配分であることも小谷（1995）で述べた。

日本的市場主義者が日本では市場メカニズムが規制等々によって働いていないと断ずるのは、多くの場合、市場メカニズムの結果として実現するはずであるとそのような人々が考える理想の状態が実際には実現していないからにすぎない。彼等の期待と現実が乖離するのは、第2－3項で見たように日本的市場主義者は市場機構が整然とした秩序を生み出すものと錯覚しているためであり、次に第2－4項で見たように、日本的市場主義者が知りえない膨大な知識を市場機構は体現しているからであり、更に、この項で見たように市場機構は工学的生産的効率性を必ずしも実現するのではなく、人々の多様な価値観を満たすのに最適だということを日本的市場主義者は理解できないからである。日本的市場主義者はより多くのパンを食べたいといった単純な価値観で人々は行

動していると想定するのに対して、日本的市場主義者の思いもかけないような複雑で、多様な価値観を人々が追及していることが、彼等の予想と市場の実現する資源配分が異なる一因となる。

多様性 言う迄もなく命題6は数学的に厳密に証明された定理を若干直観的な形に書き直したものである。数学的厳密性は社会科学においては、却って仇とすることがある。数学的厳密性は、厳密に述べられた仮定が前提となる。そのような仮定は完全には現実経済では満されていないと簡単に言うことができるから、その仮定に基づいた定理は現実問題の理解には資さないと揚げ足取りを容易にできる。そこで数学的厳密さにはあまり拘泥しないで表現されるのが通例である、命題6の背景にある社会思想的認識を記そう。

命題6'：市場経済の意義は、価値観の多様性を認め、人々がそれぞれ多様な価値観を追求することができることにある。

命題6'は、第2－1項で指摘した市場経済とエコロジーの類似性を更に明らかにする。人間の作った田・畑・牧場等々とは違い、エコロジー秩序も動植物の多様な種の共存を許すからである。ある計算では、全国牧場化によってエコロジーを徹底的に破壊したイギリス全土に存在する動植物の種の数は、アマゾン熱帯林の一本の木に存在する種の数しかないそうである。

2-7 市場経済における改革

ブルジョワ経済学 60年代後半ごろまで日本では、科学的社会主義理論と自称するマルクス経済学（K.マルクスの著述に基づいた、またはマルクス自身の経済社会理論）が主流で一般的であった。経済学と現在呼ばれているものは近代経済学と呼ばれた。多数派であるマルクス経済学者は近代経済学を蔑んでブルジョワ経済学、資本主義体制に奉仕し、資本主義体制を擁護する体制派経済学

と呼んだ。近代経済学は、現在の資本主義体制を擁護正当化するもので、保守的で社会体制に対する批判に欠け、社会体制を改革しようとする意図のないものと批判した。この批判には、社会における改革とはいかなるべきものであるかという社会科学の中心的問題が潜んでいる。

マルクス経済学者の（近代）経済学の特徴化は基本的には正しい。しかし、それが批判になると考えたところにマルクス経済学者の誤りがある。マルクス経済学者の主張は、ライオンの一夫多妻制のような動物の生態を批判し、ムチを振って変えさせようとするのが正しい科学研究であると言っているのに等しい。科学とは、逆に、たとえば個々の個体が自己の遺伝子を後に残す可能性を最大化する手段として、ライオンの一夫多妻制を理解することである。動物の一種である人間（集団）の行動の研究である経済学・社会科学一般と動物行動学とを区別する理由はない。科学とは一見不合理で不条理に見える現実の正当化・合理化であり、対象が不合理と思われれば思われるほど、それを合理化すれば優れた科学である。したがって、第2－4項で既に強調したように、一見不可思議な様相が市場メカニズムの結果となるような技術・嗜好・風土等の基礎的条件を捜すのが科学的研究である。不正・腐敗の巣とマルクス経済学者の見る資本主義を合理化するのは科学として当然であり、だからこそブルジョア経済学は優れたものであると言える。

ホバーの改革概念 科学が現実の合理化であると主張すると、社会の現状を批判したり、改革しようとする試みは科学としては誤りであるのか、という反問を受けることになる。この問いに対する答えは、K. Popper (1957) の導入したホリスティックな改革とピースマルな改革の概念的区別である。社会改革はピースマルなものでなくてはならない。しかし、近代経済学批判の中でマルクス経済学者が意図せねばならないと主張する改革とはホリスティックなものである。

ホリスティックな改革・ピースマルな改革の概念上の区別は、ポパーの説明

ではポパー自身も認めているように、十分に明確にはされていない。ピースマルな改革とホリスティックな改革の差は単なる小計画と大計画という区別でしかないように読めるところもある。以下この項では、ポパーの意図を汲んだと思われる形で両者の概念上の区別を明確化する。そうすることによって社会改革とはどのようなものであるかを論ずる。

関連情報と知識 ハイエクの指摘する知識の分散性の資源配分上での重要性の延長として、ホリスティックな改革とピースマルな改革の差を定義できる。前者は関連のある知識情報を計画者が持っていない変革であり、後者は関連する知識・情報を計画者が全て持った改革である。したがって、両計画の概念上の差は中央集権的な計画経済と分権的社会での企業内計画との差に対応する。ピースマルな計画とは、計画者が条件をすべて知り、条件をコントロールでき、外界への影響の対象への予想外のはね返りを無視できる実験室的な小宇宙についての改革である。ホリスティックな改革とは対象を支配している条件を計画者が知らず、また対象とされるものに自分が与える効果が外界にどのように影響し、それが対象にどのようにはねるかについても全く考慮していない計画であるといえる。

ハイエクの科学論を援用して、以上を次のようにもいうことができる。科学的知見とはどこにでも成立する抽象的な関係である。現に今ここに見る現象は抽象的ルールに従って具体的事実が反応した結果である。数式を使ってシンボリックに表現すれば、科学的知見とは集合 X から集合 Y への関数関係 $f(\cdot)$ を知ることである。現に見える現象は、 X の中の要素 x とそれが $f(\cdot)$ の下でとる、 Y の中の要素 $y=f(x)$ である。一般に計画者は x のとり値を予想することはできないし、選ぶこともできない。したがって、 y のとり値を具体的に事前には知りえず、定めえない。しかし、実験室的な宇宙では x のとり値の範囲を集合 X の一部に制限できる。そうして、 x を選ぶことができるので y の実現値を計画できる。これがピースマルな改革である。どのような x が取られるかも知らず、しば

しばしば $f(\cdot)$ の形も知らないで、極端な場合には $f(\cdot)$ の形を計画者が変更できると考えて、 y の特定な値を得ようとするのがホリスティックな計画である。だから、ホリスティックな計画は、ポパーのいうように達成不可能な計画、夢物語りの（ユートピア的な）計画である。

ピースマルな、つまり計画者が自分の知識・情報の制約を十分意識・考慮した計画は、自分の良く知る小さなものを対象とする小計画となりがちである。また、大きなものを対象とする大計画については計画者が関連知識を十分持っていない場合が多く、小計画については持っている場合が多いから、大計画はホリスティックな計画になりがちであり、小計画はピースマルな計画になる傾向がある。もちろん、十分知識を持っているか否かは、計画者の主観にかかわるものであるから、ピースマルな計画であるつもりがホリスティックな計画になってしまうこともあり得る。ポパーでは自然科学的な計画はピースマルな計画とされているようである。しかし、自然科学に基づいた計画も上記の定義ではホリスティックな計画となる。例えば、社会資本建設のための大土木工事のようなものである。

ピースマルな計画は、Popper（同、P67）のいうように、漸進的である。実験室的計画のように計画者が関連する具体的事実をよく知っているのがピースマルな計画であるが、現実にはこの条件が事前にすべて満たされているわけではない。したがって、知っている範囲内で、そして実際に行いながら自分の関連する知識を確かめ増やしながら少しずつ改革を進めていくことになる。この結果、改革は漸進的なものになる。一方、ホリスティックな計画では、具体的な関連知識の欠如を問題としないので急激な改革を指向することになる。

生命・財産を賭ける 日常的表現を使って以上の区別を言えば、ピースマルな計画とは計画者が自分の無知をよく心得た慎重な計画であり、ホリスティックな計画は身の程を知らない無謀な計画ということになる（Popper（同、P69）でもそのように定義されている）。この区別は、計画者の心構えとか責任感と

いった個人倫理の問題になってしまう。両者の区別は第2－6項で述べたことに回帰する。知識の分散性が資本主義によって補完されているように、知識の分散性に基づく計画概念の区別も、資金を提供する人が、または改革の対象となるものを所有している人が行うのがピースマルな計画であり、そうでない人が行うものはホリスティックな計画となる。自分の計画によって自分の生命・財産を危険にさらす人は、当然、計画に慎重になり、計画によって起こることを予期しようとし、そのためには関連する知識をできるだけ持とうとしようとする。当然、計画自体小さいものになる。自分の生命・財産を計画に賭けない人は、計画実行の結果何が起こっても自分は損失を蒙らないから何が起こっても平気であり、したがって関連知識の有無にはこだわらない。彼等は、マルクス経済学者の説くような社会の大改造計画を平気で行おうとする。ピースマルな計画とは資本主義的計画であり、ホリスティックな計画とは社会主義的計画である。しかし、以上の系として、資本主義国でも国家の行う大計画、例えば社会資本建設はホリスティックな計画になりやすいと再びいえる。

改革者が自分の財産を改革にかけないことは、慎重さの欠如の他にもう一つの問題をはらむ。改革者が自分の金を賭けない、つまり、自分の金を使わないで、また自分の所有しない対象を改革しようとするならば、改革者が変革のために使う手段は何かという問題が生じる。人々を説得するという迂遠な、そして効果の疑わしい手段によるのでなければ、その手段は、ホリスティックな改革者が手にする（つもりである）大きな政治権力以外にはない。権力を使って他人の財産や生命を脅かすことによって人を動かし、また他人の財産を使うことによってホリスティックな改革は実行される。

ホリスティックな改革とは、改革者が十分な知識も情報も持たないため、どんな悲劇が起こるかも予想されない改革である。次に、生命・財産を賭けない改革者自身は何が起こっても痛痒を感じないため、容赦なく実行される改革である。そして、独裁的な権力を使って改革者以外の人々がコストを払って行なわ

れる改革である。更に、一般的には大規模な対象に対して行われる。したがって、ホリスティックな改革は、そう考えられてきた改革が皆そうであったように、大きな社会的惨禍を引き起こす改革である。以上をまとめると、

命題7：社会の改革は、改革者が自分の生命財産を賭けるものでなくてはならない。そうでないホリスティックな改革は、大きな社会的惨禍をもたらす。

以上のような社会改革の考え方に対しては、悲惨な人々を放置しておくのかという批判が常に返ってくる。命題7の言う所は、社会の不幸は自分の正義感を示して社会的称賛を得るための道具ではなく、困っている人々を助けたいならば、まづ私財の提供を行うべきだということである。

3 社会主義としての日本の市場主義

前節では、市場経済の考え方はどのようなものであるかを論じた。付随して、その考え方から日本の市場主義がどのように乖離しているかを論じた。整然とした目に直ぐ見える秩序の愛好、知識の分散性という事実の不理解といった多くの性癖を日本の市場主義者は社会主義者と共有していることをみた。この節では、更に進んで、日本の市場主義が市場経済の考え方と社会主義の習合であることをみる。

3-1 規範または、作為としての市場経済

前節で見たように、市場主義の考え方では、市場経済は自然状態、つまり自分を支配している今ここにある現実である。しかし、日本の市場主義者にとって市場経済は、現在の日本には（完全には）存在するものではなく、現に存在するものにとって代わるべきあるべき姿・理想社会、つまり規範的な存在である。古い表現を使えば、市場経済は本来seinのものであるのに、日本の市場主義

者にとってはsollenのものである。市場経済は人間の、特に日本的市場主義者の作為によって意図的に作り出すべきものなのである。日本的市場主義者は市場主義者を名乗りながら、ハイエクの言葉を使えば、設計主義者なのであって社会主義者と変わることがない。

市場経済を規範的なもの、あるべき姿と考える日本的市場主義は、明治以来の文明開化思想、欧米の先進制度を日本に移入しなくてはならないという開化思想の延長線上にもある。それは、市場経済を歴史的所産・文化的特殊性を持ったものとする第2-1項で見た市場経済観でもある。市場経済は先進的な欧米諸国に18世紀末ごろに現れ、最近特にアメリカで完成度の高い水準に達した、規範とすべき社会制度であると理解したうえで、日本的市場主義者は、日本でもアメリカのように市場経済という優れた先進的な社会制度を実現しなければならない、日本もそのような規範に従わねばならないと考える。

ハコ作り 自然状態では（放っておけば）秩序は存在しないから、外から国家が人間社会に秩序を与えなければならないというホッブスの思想に反対して、市場主義は自然状態でも秩序が存在する、外から秩序を与えなくとも内から秩序が生じると主張する。しかし、市場経済が規範的なもので、作為によって生まれるものとする日本的市場主義者は、外から市場経済という秩序を与えようとする。多くの場合、市場経済が機能する前提として、その中で市場経済が運行する、枠組・環境・ハコ等の用語で表現されるものを彼等が作らなければならない、よく使われる用語では、整備しなくてはならないと考える。その箱に国民を入れれば社会は市場メカニズムに従って動くと彼等は考えるのである。⁸ 市場経済とは先にも述べたように、本来動植物が自分たちの間で自然に形成するエコロジー的秩序のようなものであるのに対し、日本的市場主義者にとっては、市場経済は金魚鉢という人為的な生活圏を与えられた金魚の生活な

⁸ この見方は、小谷（2001）で論じた制度主義の見方と強い関連性を有する。

のである。

人間が外から人為的に与えた環境の中で市場経済は初めて機能するものだという、日本的市場主義者のホッブスの社会観の例をあげよう。しばしば、市場取引を活発化するためには、市場メカニズムが働くようにするには環境を整える必要がある、特に法制度を整備する必要があると、当然のように主張される。最近では、証券市場の活性化や間接金融から直接金融へ移行すべきというとき、このように主張される（例えば中谷（2001））。研究開発のための環境整備の必要が叫ばれることも多い。整えるとか、整備の主語は政府であって、ホッブスのように政府による秩序づけ、特に法律の準備があつて初めて、つまり政府の作った金魚鉢へ人々を入れることによって初めて、市場経済は其中で機能するという発想である。

法律を整備しなければならないという日本的市場主義の考え方を批判したのは、社会には法律が必要でないという意味ではない。日本的市場主義者の法律観が誤っていると主張している。法律は、それによって律せられる人々自体の体験から生み出されるものである。しかし、法整備が口癖の日本的市場主義者にとっては、法律は、大日本帝国憲法や日本国憲法のように、支配者が被支配者に対して、今後の行動の枠組として下賜するものである。

間接金融から直接金融に移行しなければならないという見解は、日本経済の今後の成長分野となるべき先端的産業に資本を供給するには直接金融制度が必要であるという認識に基づいている。この見解・認識自体も、先端産業の発展に必要とされる直接金融制度をまづ政府が用意しなければならない。政府が作った秩序の中ではじめて市場経済は機能するという金魚鉢の発想である。先端産業は自からの発展に必要とする（とされる）直接金融制度の発展を誘発せるとは考えないのである。

日本国内の過疎地や発展途上国の経済発展支援などの場では、経済開発にはインフラを整備することがまず必要だと主張することが定型化されている。こ

の場合は、ハコや金魚鉢ではないが、市場経済は政府の作った土台の上に初めて成立するものだという考え方であって、ホッブスの社会観がここでも見られる。法的インフラストラクチャーという言葉をつまみ、つまり法制度とインフラストラクチャーという語を共に使って、堀内(1999, P128)は金融市場が支障なく機能するためには前もって国家が金融業者を入れるハコをつくらなければならないという社会観を展開している。

市場経済が機能するにはまづ政府がそのためのハコ・枠組・環境・土台等々を作り、整備せねばならないという理解は、交易は無政府状態の下で行われ続けたという単純な事実を忘れている。たとえば、シルクロードは、アフガニスタンのように支配地区をめぐる武力衝突を繰り返す部族勢力の間を縫っていた。日本やヨーロッパでの中世の交易も同じような無政府状態の下で行われた。もちろん、国際貿易は、政府のない領域での商取引である。インフラストラクチャーについても、産業革命期イギリスの輸送網の中心は運河であり、それは私的に建設された。道路も私的に建設された。

規制緩和 日本の市場主義者が声高に主張をしていた規制緩和論も、一見市場を重視する主張に見えて、政府による秩序付け、ハコの準備がまず必要という市場主義本来の考え方とは逆のホッブスの発想が表れている。日本の市場主義者は、放っておけば、規制にがんじがらめになって市場経済は存在し得ないから、既得権益者の反対を押し切って、政府が規制を廃止し市場メカニズムの働く環境を整えねばならないと考えるからである。

現代日本経済の様相が規制によって作られていると理解する日本の市場主義者は、彼等の反対する規制者と同じ社会経済観を共有している。俱に、政府が自らの意図を社会に押し付けることが可能で、自分の欲する状態を社会に作りあげることか可能(ハイエクのいう設計主義)であるとする。具体的な争点についてこれをみると、代表的な規制緩和論である大店法批判では、大店法による大型小売店の規制が非効率的な零細商店を残存させていると日本の市場主

義者は論じる。批判的ニュアンスを除けば、これは規制者の意図したことである。大店法といった一片の法令とそれをバックアップする公権力によって、法制定者の望むような流通形態、一般的には経済秩序を実現できると考えを、規制緩和論者は規制者と分ち持っている。この考えは、市場主義の見方ではない。Smith (1976, P234) の有名な将棋の比喻にみられるように、政府は規制によって自分の思うような社会の様相を作り出せないものであり、規制によって生じるのは多くの場合混乱であるというのが市場主義の見方である。

市場主義の立場での規制緩和についての見方も、日本の市場主義者、または規制緩和論者のものとは異なる。日本の市場主義者にとって緩和の主語は政府であるが、内側から秩序が生じるという市場主義の立場では、その主語は市場で活動する民間主体である。放っておけば、規制は崩れて、朽ち果てていく。人々が合法的・非合法的な脱法行為を工夫・発明することによって、規制が全く形骸化されていく。こうして内側から規制は緩和されていくと本来の市場主義の立場では見る。このような内側からの規制緩和の代表例は国際貿易である。労働や資本の各国間での移動が国家の規制によって禁止されているとき、この規制をかいぐる手段として国際貿易（財の国際間での移動）が行われる。よく知られているように、労働や資本が各国間で自由に動いたときと変わらない賃金や利潤率を国際貿易は実現して、少なくとも経済的側面からは資源移動の禁止は全く無効なものとなる。

利子の禁止されている中世キリスト教世界やイスラム世界でも、利子とは呼ばれないが実態的には利子と同じ機能をする報酬を伴った金銭の貸借が行なわれていた(る)。戦後日本では、利子率の上限規制に対して「歩積み、兩建」「踊り」と呼ばれる慣行が定着して、実効利子率は高かった。また、小谷（1997）は、一般には厳しいと思われていた借地借家法（の法解釈）が市場メカニズムの中で無力化されてしまっていることを指摘した。しかしながら、日本の市場主義者は市場メカニズムの内側から生じてくる脱法による規制の無力化を多く

の場合、スキャンダラスな胡散臭いものと見、ときには犯罪的行為として非難するのである。⁹

道徳 市場経済を入れるために意図的にまず作っておかなければならないハコまたは環境として、非経済学者のみならず、経済学者によってもその必要性が強く主張されるのは道徳である。人間性を道徳によって矯めておかないと、自由勝手な利潤追求が許される市場経済は不正や腐敗の温床になると多くの人は考える。だから、市場経済が機能するには、まず人々が道徳を持った存在となるように教育されねばならないと主張される（たとえば、袴田（1998）、香西（2001））。このような主張では、それを守ることが個々人の利己的利益には反する、従って放っておけば人は身につけないと想定される道徳は、暗黙裡にただし当然のように何らかの教育機関（宗教組織・政府運営の学校・私的道徳団体・報道機関等々）が意識的に個々人に注ぎ込み、そしてそれらの機関が番人となって人々に守らせるものとされている。そして、経済学の祖とされるアダム・スミスもそのような考えを持っていたとして『道徳感情論』が言及されることも多い。以上の考え方でも、市場経済は自然状態ではなく、政府等によって人為的に形成された道徳秩序の枠組みが前もってあって初めてその中で市場経済は円滑に機能すると考えられている。第2-2項でみた民度論やよく主張される自己責任の倫理の必要性も、市場経済が働く精神的枠組としてまづ道徳が必要であるという見解の一種と言えよう。

なお、政府等の作った道徳秩序が前もって必要であると、アダム・スミスも主張しているという理解は、『道徳感情論』を誤解している。この誤解は、道徳や（スミスのキータームである）同情といった言葉を早合点して、極めて常識的に理解したために生じた思い込みである。¹⁰ 『道徳感情論』における、スミスの独創性は上述のような常識的な道徳観を否定したことにある。スミスは道徳

⁹ 借地借家法の批判者の立退料に対する嫌悪感是好例である。証券会社による、いわゆる損失補填を嫌悪感を持って批判した日本的市場主義者もいた。

の起源が何であるかを論じた。国家や宗教機関が個々人の利己的な利益には反する道徳を人々に人為的に守らせることによって道徳秩序は生じうるという常識的な理解を否定して、自然状態で、政府や宗教機関の人為によらず、道徳は、個々人が利己的な利益の追求することから生ずる、人々は利己的な目的から道徳に従うと論じたのである。アダム・スミスは道徳秩序も市場秩序と同じように考えたのである。なお、田中（1993）は、『道徳感情論』について、以上と似た理解をしているように思われる。

3-2 道具としての市場経済

自生的に生じる自然秩序として市場経済をエコロジーのように理解する市場主義の考え方では、エコロジーがそうであるように市場経済は何の目的も持たない。しかし、人間によって前もって環境（ハコ、土台、枠組み等々）が整えられた後その中で機能するものとして市場経済を理解する日本の市場主義者にとっては、市場経済は目的を持ったものである。多大なコストを払って意図的に作り上げるべきものならば、市場経済は何らかの目的を達成するための手段であり道具でなければならない。日本の市場主義者は、市場経済が経済成長や経済の活性化に役立つ道具として、または、彼等の信じるような形での日本の近代化・先進化の道具として、そしてその限り市場経済を推奨するのである。この市場観は、第2-6項でみた、多くの経済学者にとっての市場機構の実現

¹⁰ 「同情」という言葉は通常ひどい目に遭った人を気の毒に思い、助けようとする心を持つことを意味する。たとえば、AがBをなぐったとき、Bを可哀想と思い、なぐさめることである。しかし、スミスの同情はそこまで意味せず、Bの肉体的痛みを他人も感知できるという意味にとどまる。したがって、可能性としては可哀想と思って助けるだけでなく、逆に、だからこそ自己の利益のために、Bを支配するために自分もBをなぐるという場合も含む。このような解釈でないと、スミスが、他人の喜びも「同情」の対象というとき、論旨が通らなくなってしまう。スミスは同情をこのような、弱い意味で定義した上で、通常の同情概念、つまり多くの場合人々はなぜBの味方となるか、自分はBをなぐらないのかを仮定するのでなく、論理的に導出しようとした。

する効率性の解釈と対応する。多くの人々にとって市場経済は経済成長や所得増加の道具であるから、それが実現する効率性とは工学的生産の効率性や所得増を意味するものではなくてはならないのである。既にみたように、市場経済が自然状態や自生的秩序であるということは、市場が人間を支配しているということである。しかし、日本的市場主義者は目的になかった道具として市場経済を選ぶから、彼等にとっては、逆に、人間が市場を支配しているのである。

言葉の上では市場を道具として使うという同じ表現がされていても、日本的市場主義者のホリスティックな立場と内部改革として市場を企業が企業内に導入するピースマルな道具としての市場とは区別しなくてはならない。独立採算制の事業部制をとる企業で各事業部が資金は財務部から利子を支払って借りるという、市場を模倣した企業内改革は企業経営者がその内部において知識を十分持ち、また各部門を所有する実験室的な改革である。これに対して日本的市場主義者のいう市場を道具として使う改革は、日本経済全体という彼等がよく知りもしなければ所有もしない対象の改革を彼等が中心になって進めようというホリスティックな改革である。

政府介入 市場経済を高く評価する考え方は政治的な自由主義と対になっている。社会は個々人の多様な価値観の実現を最大限尊重するようなものであるべきであるから、第2－6項で見たように人々の多様な価値観を最大限相互調和する形で実現することのできる市場経済は好ましいのである。この見方は、日本的市場主義者の経済観ではない。彼等は、市場が多くの人の多様な価値観を可能なかぎり実現することは評価しない。彼等は自分自身の目的、自分達の考える社会目的の実現のための道具として市場経済を評価する。従って、市場経済によって自分達の考える目的が実現しないと考えれば、つまり、役立たない道具と思えば、彼等は市場経済を主張しないし、他人の価値観実現を阻げることになる大規模・強力な政府介入を求めることも躊躇しない。

例えば、日本的市場主義たちは日本にもハブ空港が必要であると考え、国が

中心となって建設するべきだと主張する。市場経済が好しいのであれば、民間が勝手に空港を作るのに任せておけばよく、国の役割は例えば環境評価にとどまるべきだとは主張しない。彼等は航空運賃が下がって欲しい、または航空サービスがもっと良くなって欲しいと思っているから、多大な補助金を事実上国が供出することになる、国による空港建設を主張し、空港建設の民営化のように空港建設を抑制する可能性があると思われる市場化政策を主張しない。¹¹ ハブ空港が日本に必要と主張する人々は、「国際航空システムの要となる中心的空港」であるハブ空港が「シンガポールや香港や韓国にとられる」ことを恐れ、「日本の多くの人々がソウルを経由して欧米に飛ばなければならなくなる」ことを憂慮している（「」内は伊藤（1996, P92）からの引用）。このようなナショナリズムへの訴えは、「日本人の主食で、日本文化と深い関りのある米は日本人が作らねばならない」といったように、国産品愛用運動や貿易保護主義の常套手段である。日本の市場主義者が馬脚をあらわしたとってよい。

市場主義者を自称する人々は地価を下落させるために土地税制や土地融資抑制のような強い政府介入も提唱してきた。土地収用に関する政府の権限強化を求める人も日本の市場主義者には多い。また最近では政府主導で不良債権処理を進めるべきであるとか、過剰債務企業を整理すべきとか、銀行の事実上の国

¹¹ ハブ空港とは、そもそも路線バスのバス駐車場に対応する駐機場であって、バス駐車場がそうであるように、土地を多量に必要とする駐機場は地域で相対的に地価の安い所に作られるのが当然である。アメリカのハブ空港の代表が、デンバー、ダラス＝フォートワースであるように、東アジアでソウルがハブ空港地であって不思議ではない。日本人がソウル経由でアメリカに行くのは、ニューヨーク人がデンバー経由で東京に来るのと同じことで、何らナショナリズムの観点から憂慮すべきことではない。

ハブ空港が一旦、国際航空の要のようにみえるのは、バスの駐車場が営業所と呼ばれるのと同じことである。路線バスの路線図をみると、当然ながら駐車場（営業所）が運行の要になってハブ・アンド・スポークを形成している。駐車場は当然ながら、車乗り、運転手の人操りの中心にもなっている。

ニューヨーク、ロスアンジェルス等の空港もハブ空港であると言って、東京にもハブ空港が必要と主張する人もある。それならば、ハブ空港は単に大空港の言い換えにすぎない。大空港という名目ではその建設のための政府資金を引き出すことができないので、特別な意義をもつかのような目新しい印象を与えるハブ空港という用語を使っているのにすぎない。

有化である強制的な銀行への資本注入などを主張することも、日本的市場主義者は躊躇しない。第3-1項で既に言及したが、直接金融の振興のために政府が補助金を出すことも提唱する。

介入の正当化 このような主張は当然政府介入は好ましくないという市場主義の建前と矛盾してしまう。そこで、日本的市場主義者は、例えばバブルによって、規制によって、日本的慣行によって市場は機能していないから、または第3-1項の市場理解に沿って、市場の働く環境が日本には整備されていないから、更には市場に任せておけない緊急事態だから政府の介入は正当化されるといって、矛盾を糊塗する。このように、自分の望まないことが生まれれば、市場の結果ではないと言って介入が正当化できるならば、市場主義の建前の下でいつでも自由に強力な政府介入をすることができる。この考え方は市場が自分を支配しているのではなく、自分が市場を支配しているという考え方の当然の帰結である。

繰り返しになるが、市場経済の意義は誰もが一人では持ちえないような多量の、しかも分散した知識を利用できることにある。このことは、前節で見たように、観察者が市場経済の結果がどのような事実に基づいているのか一般には説明できないことを意味する。換言すれば、経済の観察される姿が自分の予想する市場機構の結果と異なっても、それは自分の知らない知識のためなのであって市場機構が働いていない証拠にはならないというのが市場経済の考え方である。市場の機能不全を宣言して政府介入をすぐに求める日本的市場主義者はこの点を理解していない。既に第2-4項でも述べたが、自分の予想したことが市場メカニズムの中で実現するべきであると考える日本的市場主義者は、市場主義者ではなく計画経済主義者なのである。

3-3 構造改革としての日本的市場主義

日本的市場主義者は、日本社会全体を新たに立て直すことを目的とした改革

を目指している。彼等は、自分たちの目指す改革を好んで構造改革と呼ぶ。市場経済を高く評価するという人々が、社会主義や計画経済への志向の強い人々によって愛好され続けてきた構造改革という用語で、自らの提言する改革を呼ぶのは一見混乱を招くだけと思われる。しかしながら、この用語の使用は、日本社会の全体的改革という日本的市場主義者の意図からいって適切なばかりではなく、マクドナルドで代表されるフランチャイズチェーンのロゴマークのように、日本的市場主義者が社会主義者や計画経済論者と一つの集団を作っているということを願って適切なのである。

習合 第2－7項で述べたように、社会主義を指向するマルクス経済学者は（近代）経済学を社会体制に対する批判と社会改革へ姿勢に欠けていると非難した。この非難に対しては、第2－7項で見たように、マルクス主義者の科学理解の誤りと人間社会の改革についての理解の誤りを指摘すべきであった。しかし、日本的市場主義者のマルクス経済学者の非難への対応は違ったものであった。彼等は（近代）経済学を換骨奪胎してマルクス経済学的な思考や文明開化的な発想に馴らされた人々の趣向に合うものに（近代）経済学を変えた。つまり、経済学をマルクス主義または社会主義と習合させた。これが第3－1項、第3－2項で述べたことの意味することである。

市場経済は既に存在する自然状態であり、非歴史的なものであるのに、日本的市場主義者は市場経済を規範的なもの、または、すべての国・時代に存在するとは限らない文化的に特殊な歴史的存在と再解釈した。このような解釈によって、日本的市場主義者は市場経済を、それへと日本社会が改革によって作爲的に転換されるべき規範的な先進的社会組織と理解することができた。このような経済学の解釈は、第2－2項でみた高島善哉・大河内一男といった人々による昔しのアダム・スミス研究（または誤解）の衣鉢を現在に継承するものといえる。大河内（1968）の解説は、イギリスをアメリカに置き換え、スミスまたは『国富論』を経済学に置き換えれば、そのまま日本的市場主義のマニフェ

ストとなる。経済学のこのような再解釈と理解によって、日本的市場主義者は市場経済を高く評価すると同時に、マルクス経済学者のように社会体制の現状を全体的に批判し、「日本経済を大きく脱皮させる転換期とならなければならない」（現代経済研究グループ(1990, P i) ）、または「日本的システムを新たなシステムに置き換える努力がなされなければならない」（同, Piii）というように、社会主義やマルクス主義の大きな影響を受けた人々とそっくりな口調で、現代日本の社会経済体制を全面的に変革して市場経済を建設することを唱えることが可能となった。そして、社会主義者が使いなれた構造改革という言葉を、市場経済を擁護しながら彼等も使うことができるようになった。

第2－6項でみたように、日本的市場主義者の考える効率性とは生産的・工学的生産性であり、そして、第2－7項でみたように彼等はそのような効率性を市場メカニズムを使って実現しようとする。このことも、日本的市場主義が社会主義と市場経済の考え方の習合であることをよく示している。なぜなら、社会主義者も工学的・生産的効率性を目指し、それを中央集権的計画経済によって実現しようとしたからである。

社会主義者が自らを「社会主義の信奉者」と呼ぶように、日本的市場主義者も自らを「市場メカニズムの信奉者」と胸を張って呼ぶことを好む。このことから、日本的市場主義が市場経済の見方と社会主義の習合であることが窺える。何度も繰り返すように、市場経済は自然状態であり、全ての人間を支配するものである。そのようなものを“信奉する”というのは万有引力の法則を信奉するということにおかしい。「市場メカニズム（または社会主義）の信奉者」という表現には、社会の組織化の方法には色々あり、人間(人間社会のリーダー)はその中からどれかを選ぶことができるという暗黙の前提がある。その中で最も優れたものである市場メカニズム（または、社会主義）を選ぶ、衆愚とは異なる自らの合理性と聡明さを誇っているのが信奉者という表現である。ここにあるのは、市場経済は規範的なものであり、市場経済が人間を支配するのでは

なく、日本の市場主義者が市場経済を選びとるという、社会主義を信奉する社会主義者と同じ考え方である。

社会主義者と日本の市場主義者の相違は、社会主義者は個々の企業の経営にまでに自分達が口出すのを当然と考えたが、第3-1項でみたように、日本の市場主義者は、人々の入る箱を自分たちが作れば、人々はその中で彼等が望むような社会を実現するように自動的に動くと一般に考えていることである。もちろん、この相違は原則としてのものにすぎない。箱を作った後自分たちの望むような結果が得られない時には、日本の市場主義者も、自分たちの目的を達するためにハコの中の経済主体の行動を制約するような強い介入を行うことを主張するのに躊躇しないことは前項でみた。また不良債権問題に関連して日本の市場主義者は銀行経営に口出しをしようとしている。

ホリスティックな改革 社会主義者が社会主義社会を建設するように、市場経済を建設しようという日本の市場主義者の改革は、マルクス主義のそれと同じく第2-7項で定義した意味でホリスティックであり、そして社会主義者と同様にホリスティックな改革とピースマルな改革の概念上の区別をもたない。この点は、この節で少し前に引用した現代経済研究グループ（1990）の主張にもうかがわれるが、別のもっと明らかな例をあげよう。

伊藤（2001）は、ゴーン氏による日産自動車の改革のように日本経済を改革すべきだと、日産改革と日本経済の改革を同列に論じている。しかし、日産自動車の改革は、その大株主ルノー（または、その代理人ゴーン氏）による、ゴーン氏が隅々まですでに知っている（であろう）日産自動車の改革である。それは第2-7項で述べたピースマルな改革である。一方、伊藤が日本経済の改革と呼ぶのは、日本政府も伊藤も所有しない、マクロ統計データ程度しか知識を持たない日本経済を日本政府や伊藤が変革しようというのである。これは第2-7項で見たホリスティックな改革である。

日本の市場主義者は、株式持ち合いのため株主支配の弱い日本では企業経営

者のモラルハザードが起きやすいと主張している。これは第2－5項命題5の含意であって、株主でない企業経営者が政策決定をすると、彼等は決定が誤った時の損失を負担することが少ないからである。この理解の含意は、第2－7項のように、日本経済への政府介入やその改革はなるべくつつましいものにとどめるようにすべきであるということである。しかし、日本的市場主義者はそのようには考えず、むしろ大胆かつ急激な日本経済の政府による改革をマルクス経済学者のように求めるのである。第2－7項で指摘したように、ホリスティックが改革が殆ど常にそうであるように、日本経済の構造改革はモラルハザードを大規模に起こすと予想するのが当然である。日本的市場主義者は「(自分たちではない他人の) 痛みを伴う」日本経済の改革をしなければならないと強調している。モラルハザードを起こさないためには、痛みを改革者自身が実際に感じる、つまり、痛みの内部化が必要だから、日本的市場主義者がこのような発言をするのは、彼等が既にモラルハザードを起こしている証拠である。

3－4 全体主義としての日本的市場主義

「黒い猫・白い猫」 市場経済を道具としてみるという日本的市場主義者の考え方は、中華人民共和国主席であった故鄧少兵の唱えた「黒い猫、白い猫」論（社会主義市場経済論）と共通した思想である。社会主義市場経済論は、白いネコでも黒いネコでもネズミをとるネコは良い猫であるように、中華人民共和国を富強にするのに役立つならば市場経済も利用しようという考え方である。社会主義市場経済論は、中国共産党の中国支配を揺るがさない限り市場経済を道具として使うという考え方であって、1989年の天安門事件にみられるように何のためらいもなく自由化は強権主義や全体主義的な弾圧にすり替わる。市場を道具としてみる考え方を共有する日本的市場主義でも強権主義に市場志向がすり替えることは第3－2項で既にみた。

ブリジネフ・ドクトリン 必要とあれば市場経済の停止や政府の強力な介入を

求める日本の市場主義者の考え方は、天安門事件を起した社会主義市場経済論と同じであるとともに、介入それ自体を正当化する論理構成は、別の社会主義大国であるソ連の案出したブレジネフドクトリンと同じである。1968年夏チェコスロバキアの自由化民主化運動を軍事介入によって弾圧したソ連は、内政不干渉や民族独立といった国際法の原則に反するという国際的な批判的となった。これに対して、ソ連政府はこの介入を次のように正当化した。ブルジョワ勢力の陰謀によって労働者階級の支配が危機に瀕し、労働者階級の利益が危機にさらされるような状態になったときには、内政不干渉や民族独立といった国際法は棚上げされる。労働者階級の支配する友邦を助け、労働者階級の利益を守るために、ソ連およびその他の社会主義国は軍事介入することが許されると宣言した。これをブレジネフドクトリン（制限主権論）と言う。もちろん、ブルジョア階級の陰謀があると判断するのは、軍事介入をするソ連自体である。以上の論法は、ブルジョア勢力の陰謀を無知や既得権益の追求等に起因する市場メカニズムの不機能に、労働者の利益を消費者の利益に、内政不介入は政府の不介入に読み替えれば、強い政府介入を正当化する、日本の市場主義者の論法と変わらないものとなる。

集団化 野口（1993）に代表されるような日本の市場主義者の土地・住宅政策では、都市中心部や通勤路線の駅近辺で細分化した土地に低層老朽住宅が建っているといった事態を非効率な土地の低利用と断定し、これらの土地を集約化して高層マンションを建設することによって住宅問題が解決できるとされている。自然とそのような解決がなされないのは、土地信仰といった不合理な考えや、既得権益故に維持されている不合理な法制度によって、市場メカニズムが働かないためであると認識されている。そして、高率の土地（地権）保有税、たとえば高率の固定資産税を課して、低度利用している人々に土地を手離せるような政策がとられるべきであると主張される。この見解は、コルホーズ・ソホーズを作った旧ソ連の農業集団化論とそっくりであり、クラーク撲滅も思い

起こさせる。

1927年第15回ソ連共産党大会での政治報告において、スターリンは、ソ連農業の発展の遅い理由は、バラバラになった土地が小農経営や零細農経営の後進的な農法に任されているからであり、したがって土地を集約し大経営化して、農業機械やトラクターを用いる科学的耕作方法を使った農業の集約化をすればソ連農業は発展していくであろうという趣旨のことを述べている（マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所（1954, P322-328）参照）。農業を住宅事情に、バラバラになった土地や零細農経営や後進的農法を細分化した土地や低層老朽住宅等の低度土地利用に、集約化・集団化・トラクターの使用・科学的方法を近代的高層マンションに読み換えれば、スターリンと野口の主張はほとんど同じものとなる。¹²

両者が同じような発想のパターンに立っていることも明らかであろう。両者はともに、国民一般の蒙昧が彼等自身を不幸な後進の状態に停滞させ続けているとみる。もし、国民一般が開明的であれば、国民は、先進的近代的方法の採用と大規模化という国民自身が幸福になれる道に自分から赴くはずであるのに、蒙昧なためにそのようにはしないと、両者はみる。そこで両者とも、強権を用いても自分たちが国民のために活路を開いてやるのだと考える。

よく知られているように、ソ連の農業集団化は結局の所農民から農作物を工場労働者のために徴発することであった。同じく、日本的市場主義者は都心や主要駅周辺の小地権者から土地を徴発して都市サラリーマンに住宅を与えること目的としている。スターリンは手段として軍事力を使ったが、日本的市場主義者は露骨に武力を使わないで、現在の地権者に地権保有禁止的・懲罰的な税金を課すことによって、地権者を土地から追い出そうとしているのである。高率の税は強い政府介入であって、市場主義の建前と反することは、上述のよう

¹² 大店法批判者の日本の流通理解も、スターリンのロシア農業の理解とよく似ている。

に市場メカニズムが働いていないという理由で無視される。

ソ連は農業集団化に武力を使う正当化として、ブルジョワ勢力や帝国主義者の回し者である、(社会主義)道徳的には劣悪な、同情の余地のないブルジョワの人々に対して武力を行使するのだというレトリックを用いた。このため、たいしたこともない農民に、クラーク(富農)というレッテルを貼って迫害した。同じように、日本の市場主義者も、小地権者に対する地権保有禁止の税を道徳的に正当化するために、既得権益者というレッテル貼りを行って、地権者は正常な市場メカニズムの働きを歪める制度を維持することによって(正当な対価でないというニュアンスを持つ)既得権益を得続けようとする、道徳的に怪しい、反社会的な人々であるという印象を与えるように努めた。

言う迄もないが、現在は批判されるのが当然とされるソ連農業集団化は、当時は、固定資産税引き上げが土地政策として現在評価されているように、高く評価されたのである。

「産めよ、殖せよ」 市場主義者としてよく知られた小宮(1999)は、1990年代初めから現在まで続く日本経済の停滞の原因は少子高齢化の下で年金問題を中心に人々が将来に不安を抱いているためと判断して、若い人々が子供をつくるように奨励すべきだと主張している。この主張は、戦前の日本で兵隊数を多くするため「産めよ、殖せよ」の人口増加奨励策が行なわれたのを思い起させる。

命題6で見たように、市場経済は個々人の価値観を前提にして人々の価値観が最もよく満たされることにその意義がある。人々の価値観を満たすために経済、例えば経済成長がある。したがって、第2-6強調したように、経済停滞が人々の価値観を満たすのに役立てば、停滞が好ましく、市場メカニズムは経済停滞を実現するのである。小宮の診断通り1990年代初めから続く日本経済の停滞が人々の子供を作りたくないという価値観に起因するものならば、市場経済をよしとする立場からは、停滞こそ人々の価値観を良く満たすように市場メ

カニズムが働いた好ましい結果である。

この市場経済の考え方とは逆に、小宮は、子供を何人作るかという人間のプライバシーの最奥にある、したがって個々の人間の価値観の根幹の内容といえるものを経済成長や経済安定のために従属させるべきだと主張している。この主張は、軍国主義者の「産めよ、殖やせよ」政策と同じく、市場経済の考え方とは逆の、個々人の価値観の多様性を認めず、社会全体の利益と想定されるもののために個人のプライバシーや価値観に従属させようとする考え方である。

安全指向 今後の日本経済の成長のためには先端的産業やベンチャー的な企業が数多く現れなければならないと、主張されることが多い。そのためには、リスクをとる資本が資本市場通じて多く供給されねばならない。ところが、日本では資金の最終供給者である家計が慎重で、銀行預金など安全な形態でしか資産保有をしようとしなない。この結果、経済は成長に必要な先端的ベンチャーの企業に資金が供給されない、これが日本経済の問題であると指摘する人々がいる。しかし、市場メカニズムによる資源配分が好ましいという市場主義の立場に立つのであれば、人々が安全を求めて先端産業には投資せず、そのため日本経済が成長しないというのが正しい現状判断であれば、それは好ましいことであり、日本経済には何ら問題はないのである。家計の安全指向を問題とする人々は、やはり、経済成長という社会全体の目的のために、個人の嗜好や価値観に従属させようという考え方の人々なのである。

3-5 畜産業としての日本的市場主義

市場経済は動植物がつくるエコロジー的秩序に似たものであることは何度も繰り返した。しかしながら、日本的市場主義者にとって市場経済は牧場であり、彼等は畜産家である。

家畜は自然の生活 (sein) を送ることが許されているわけではない。彼等は人間の考えたあるべき生態 (sollen) を持たねばならない。日本的市場主義者が考

えるように、家畜は、人間の整備した環境(箱)の中に入れられる。人間の作った畜舎の中、またはフェンスで囲まれた牧場の中に入れられる。牧場の中で、または畜舎の中で家畜は自由な生活を一見送っているようにも見える。日本の市場主義者のいう自由な経済活動とか規制のない経済というのは、牧場の中での一見した表面上自由な家畜の生活にすぎない。彼等が規制緩和を言うのは、小舎飼いか放牧かの論争の中で小舎飼いをよしとする官僚に対して放牧の意義を強調する畜産学者のようなものである。

日本の市場主義者と同じく、人間がわざわざ農場やフェンスで囲った牧場を作るのは目的があつてのことである。家畜の自由な生活はこの目的にかなう限り許されるものである。動物を囲った目的のためには、どんな残虐な目にも動物はあわされる。オスは生後間もなく殺されるか、去勢される。生存を許された動物は焼き印を押される。疫病が流行すれば予防的に殺される。結局最後には、天寿を全うするずっと以前に皆屠殺される。同じように、日本の市場主義者の下では、スターリン治下と似た残虐な目に経済主体は会うことはすでに見た。日本の市場主義者が、過剰債務企業の法的整理が日本経済の回復のために必要だと主張するのも、疫病予防のための屠殺に似ている。不良債権問題解決のために、たとえ銀行が望まなくとも公定資金を強制的に注入すべきと彼等が主張するのは、フォア・グラを作るために無理矢理にガチョウの口に餌を押し込むのを思い起こさせる。畜産業にとってブリーディングは重要な業務である。日本の市場主義者も日本経済の安定的な成長のためにはブリーディングに努めることが重要であると主張していることも見た。

経済を農場のように考えるのは社会主義者の経済理解でもある。だから日本の市場主義者は社会主義者の一種である。違いは、社会主義者の社会では人間は動きもつかない籠の中に入れられたブローラーのように扱われるのに対して、日本の市場主義者の社会では人間は放し飼いにされることである。社会主義国では労働者は解放されて幸せな生活を送っていると、社会主義者は主張し

て、失笑を買い、人々を怒らせた。牧場でのびのびした生活を送っている家畜を指して、畜産家が自分は動物愛護主義者といっても失笑を買う。同じように、日本的市場主義者が自分たちは市場経済を高く評価し自由な経済活動を擁護しているといえ、失笑を買わねばならない。

4 結語：伝統思想としての日本的市場主義

日本的市場主義者は、自らを進歩的革新的と自認し、日本経済を新たな時代に脱皮させ、日本経済をグローバルスタンダードに合致させる改革を進めようと意気込んでいる。この自己認識とは逆に、彼等は実は伝統的な観念に取り憑かれた人々である。ここで日本的市場主義が伝統的思想であるというのは、すでに述べたように日本的市場主義が社会主義の再生だからだけではない。日本的市場主義は、徳川時代の社会観を引き継いでいるという意味でも伝統思想であると思われる。第1節で述べたように、日本的市場主義者（のみならず日本社会を現在論じている多くの人々）は、現代日本の諸制度慣行が本来あるべき姿から逸脱しているという認識を持っている。1930年代に生まれ、戦後も大きな影響を及ぼし続けた「講座派」も、マルクス主義的な用語を使って、本来の資本主義の形から逸脱した「日本的」または「半封建的」な日本資本主義の本質を規定することを目的としていた。このような、日本的市場主義者、「講座派」の認識は江戸時代の社会思想の現代化と思われる。江戸時代の社会思想について私は多くを知ることはないから、以下はほんのアイデアといってもよい。しかしながら、近代及び現代日本経済についての考え方が、ほとんど忘れられたといってもよい思想的伝統に呪縛されている可能性があることを指摘することは価値があるであろう。

徳川時代には日本の政体（幕藩体制）は（朱子学的）規範から外れた、間なものと考えられていたようである。この歪みを正そうとする、つまり天皇を中心とした政治体制に戻ろうとするのが尊王主義の運動であった。政治体制のみ

ならず、社会関係も正道を外れたものと考えられていたようである。婿養子や姉が死んだ後妹が後添いとなるといった徳川時代の婚姻慣行も、朱子学的な規範（つまり、当時のグローバルスタンダード）に反する、閨な、正さなければならない異常さのように考えられていたようである。日本の市場主義は、「講座派」とともに、徳川時代の日本の社会体制を閨とする朱子学的社会観の伝統を墨守しているものとも思われる。この小論の最初に、日本の市場主義者は強い正義感をもって市場経済を唱えていると述べた。強い正義感も朱子学的伝統の特徴と思われることも指摘することは価値があるであろう。

参考文献

- 伊藤元重（1994）『挑戦する流通』講談社。
 _____（1996）『市場主義』 講談社。
 _____（2001）「経済再生の鍵は3つの施策だ」『中央公論』 5月号 pp48-53。
 岩田規久男（2001）「やさしい経済学 金融の改革を問う ②」『日本経済新聞』 2001年1月12日朝刊。
 奥野正寛（1990）「日本の政治経済システムを問い直す」現代経済研究グループ 編『日本の政治経済システム』 日本経済新聞社。
 大河内一男（責任編集）（1968）『世界の名著31 アダム・スミス』 中央公論社。
 小谷 清（1995）『反特殊主義の経済学』 東洋経済新報社。
 _____（1997）「借地借家法の中立性」『ジュリスト』no.1124, 1997年12月1日号 pp60-65。
 _____（2001）「制度主義と主語の欠落」『筑波大学経済学論集』第47号, 2001年10月, pp135-166。

現代経済研究グループ (1990) 「まえがき」現代経済研究グループ編『日本の政治経済システム』日本経済新聞社.

香西 泰 (2001) 「「忠実」から「誠実」へ」『日本経済新聞』 2001年 6 月30日朝刊.

小峰隆夫 (2002) 「内閣調査課」『日本経済新聞』 2002年 5 月28日朝刊.

小宮隆太郎 (1999) 「日本経済の課題 中長期の視点から」『日本経済新聞』1999年 1 月 4 日朝刊.

ジェイコブス, J. (2001) 『経済の本質』香西泰・植木直子訳 日本経済新聞社.

高島善哉 (1968) 『アダム・スミス』 岩波書店.

田中正司 (1993) 『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房.

中谷 巖 (2001) 「構造改革の先送り避けよ」『日本経済新聞』 2001年 9 月18日朝刊.

西澤潤一 (1989) 『独創は闘いにあり』 新潮社.

野口悠紀夫 (1989) 『土地の経済学』 日本経済新聞社.

_____ (1992) 「日本都市における土地利用と借地・借家法」 宇沢・堀内編『最適都市』 東京大学出版会.

_____ (1993) 『日本経済 改革の構図』 東洋経済新報社.

ノーブ, A., (1982) 『ソ連経済史』 石井規衛・奥田 央・村上範明他訳 岩波書店.

袴田茂樹 (1998) 「「低信頼社会」の脆さ露呈」『日本経済新聞』 1998年 9 月11日朝刊.

堀内昭義 (1999) 『日本経済と金融危機』 岩波書店.

マルクス=エンゲルス=レーニン研究所編 (1954) 『スターリン全集 第10巻』 大月書店.

Hayek, F. (1973, 1976, 1979) *Law, Legislation and Liberty vol.1, vol.2, vol.3,*

The University of Chicago Press.

Popper, K.R. (1957) *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul.

Smith, A., (1776) *The Theory of Moral Sentiments*, P.D. Raphael and A.C. Macfie ed. Oxford Clarendon Press.

_____ (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* The Tuttle edition, Charles E. Tuttle Company.

Stiglitz, J.E. (1994) *Whither Socialism* The MIT press.